

高田時雄教授退職記念

東方學研究論集

[日英文分冊]

東方學研究論集刊行會 編

East Asian Studies

Festschrift in Honor of the Retirement of Professor TAKATA Tokio



2009年 攝於聖彼得堡會議中



1976年
留學巴黎時攝於街頭



1993年
在香港舉行的
敦煌學會上做研究報告



2013年
在上海復旦大學進行演講

東方學研究論集 [日英文分冊] 目次

序文	木田章義	1
高田時雄教授の學問		3
隋經『阿難見水光瑞經』の出現	赤尾榮慶	25
敦煌の佛教儀禮と講唱文學—P.2091『讚釋文』、『踰城日文』を中心として—	荒見泰史	34
藏文注音西夏佛經 Or.12380-1842 (K.K.II.0234.k) 試釋	池田 巧	46
敦煌の十萬頌般若經用紙の再利用	岩尾一史	65
北宋期の呉庸という人物について—『水滸傳』の呉用との關連から—	上野隆三	75
「蘭亭序」および「尚想黃綺」帖の西域における流傳	榮 新江	89
琉球稿本『官音簡要揀選六條』について	木津祐子	105
岩瀬文庫藏『俗語解』にみる江戸後期漢籍受容の實態 —『字彙』『字彙補』『正字通』『訓蒙字會』を例として—	玄 幸子	119
『說文解字繫傳』「通論篇」引用書考	坂内千里	131
種徳堂本『春秋經傳集解』について	高橋 智	143
『唐詩類選』 雜考—類書と唐人選唐詩—	永田知之	153
シヨオ語の所有者表現—中國南部における地域特徴の殘存—	中西裕樹	164
高昌故城調査の統合による探檢隊調査遺構の同定 —地圖史料批判に基づく都市遺跡・高昌の復原—	西村陽子・北本朝展	181
青い服の少女—張恨水、張愛玲における女學生イメージ—	濱田麻矢	197
コートン地區ドモコ發見トブルクトン 1 號佛寺と瞿摩帝寺傳説	エリカ・フォルテ	210
日・中における正倉院藏「王勃詩序」の“發見”について	道坂昭廣	228
江戸時代に出土した博多聖福寺の銀錠について	宮 紀子	241
新出の『金藏論』敦煌寫本	本井牧子	254
「假」字音義辨析	森賀一恵	268

『婚禮新編』卷之一所收「書儀」初探	山本孝子	282
中世イラン語と中古漢語—「沙に消えた中國語」をめぐって—	吉田 豊	294
Notes on the Medieval Buddhist Stone Sūtras from Qionglai, Sichuan	Huaiyu CHEN	303
An introduction to materiality and text organization in early and medieval Chinese manuscripts	Jean-Pierre DRÈGE	320
Ashige and Wang Daiyu Encountering Buddhism in the <i>Yimani Muzhimoluo</i> and <i>Xizhen Zhengda</i>	Leopold EISENLOHR & Victor MAIR	332
New incarnations of old texts: Traces of a move to a new book form in medieval Chinese manuscripts	Imre GALAMBOS	369
Assigning a Title to Dunhuang Document Pelliot 2196 on the Basis of the Version among Ancient Japanese Manuscripts	OCHIAI Toshinori	390
<i>Depictions of Tributaries of the August Qing</i> 皇清職貢圖 and <i>Hyacinth Bichurin's First Album</i>	Irina POPOVA	401
The Most Common Healing Liturgy at Dunhuang: An Experiment in Textual Criticism	Stephen F. TEISER	416
Tablecloth and the Chinese Manichaean hymn <i>Shou shidan ji</i> 收食 單偈	WANG Ding	438
On the Old Uyghur translations of the Buddhāvataṃsaka Sūtra	Abdurishid YAKUP	455
Fragments of a Chinese—Old Uigur dictionary	Peter ZIEME	468
編集後記		483
執筆者一覽		484

東方學研究論集 [中文分冊] 目次

高田時雄教授之學問	1
《俄藏黑水城文獻》“亡牛偈”考釋	蔡 榮婷 21
談“別譯”——讀《吐魯番考古記》節記之一	柴 劍虹 34
中國古代的“曆日”和“日曆”	鄧 文寬 41
國圖敦煌特藏《大般若經》的文物狀態概覽	方 廣錫 49
十七、十八世紀歐洲科學儀器製造家與清宮典藏天文儀器	馮 錦榮 67
法藏敦煌文獻 P.2207 Pièce 1-4 考釋	馮 培紅 81
吐魯番出土“餃子”名物考	高 啟安 95
一件新發現的敦煌寫本《論語注》跋	郝 春文 113
讀〈四聲等子序〉小記	黃 耀堃 120
中唐科舉改革與存廢之爭	金 澄坤 134
梵蒂岡人類學博物館藏長城圖探研	李 孝聰 146
《真文要解上經》考論	劉 屹 156
晚唐五代敦煌道教的基本背景與道觀問題	劉 永明 164
翁方綱與朝鮮金阮堂論學書札述議	劉 玉才 180
略論唐朝祥瑞制度	孟 憲實 189
論《汗簡》、《古文四聲韻》引李商隱《字略》書名異稱溯因	沈 寶春 205
唐代法書鑒藏家的譜系——從武平一到司空圖	史 睿 220
鄭喬林本《水滸》的特徵	氏岡真士 237
唐宋之際敦煌僧人榮譽攷論	孫 寧·劉 進寶 247
談敦煌所藏唐代古體小說整理研究之成果——以《周秦行紀》爲例	王 國良 260
敦煌文獻北圖藏本7677（夜98）《咒食施一切面然餓鬼飲食水法》研究	王 三慶 272
試論《洪武正韻》“覃”韻的性質	吳 聖雄 283
《相鶴經》考	余 欣 303
敦煌變文整理之展望	張 涌泉 316
武則天出家寺院考	趙 和平 329

吳其昱先生抄集《酒城酬唱集》手稿及其箋識	鄭 阿財	348
敦煌寫本 P.4873《羸金》殘卷考釋	鄭 炳林·魏 迎春	360
《天津城廂形勢全圖》考	鍾 狷	371
爭奇文學《燕子賦》與《貓鼠相告》之比較研究	朱 鳳玉	384
從告於廟社到告成天下——清代西北邊疆平定的禮儀重建	朱 玉麒	397
編後語		413
執筆者一覽		414

序 文

高田時雄君の退職を記念する研究論集の序文を書くことになるとは想像もしていなかった。高田君の學者としての業績については編集委員による丁寧な解説があり、高田學の全容が的確に紹介されている。本書には高田君と研究交流のあった錚々たるメンバーによる論考が集められているので、高田君の研究分野がよく分かるようになってきている。一般的な中國語學・中國文學の分野を越えた、東方學のさまざまな分野にわたる多彩な論文に圧倒される。

もともと高田君は卒業論文として聞一多を研究していたが、大學院入學後に中國音韻學を志すようになった。その頃高田君が音韻學の何をテーマにしていたのかは知らなかったが、突然、フランスの國費留學生に應募し、並み居るフランス語専門の申請者を押しつけて選ばれた。フランス語は獨學であったので、採用されたのは驚きであった。フランス所在の敦煌資料の研究というテーマが評価されたらしいが、彼の語學能力が発揮されたということでもあろう。

その後、フランスに行ったまま消息もなく、生きていたのやら死んでいるのやら、日本ではまったく分からなかった。フランスでは敦煌文獻についての研究を行い、チベット語も學び、歸國したときにはすでに西域文獻讀解に必要な多くの言語を習得していたようで「さすがに高田」と思ったものである。その後の活躍は今さら言う必要もないだろう。

さて序文らしく本論集が記念する高田君の學問と人柄について譽めあげなければならぬのであるが、どうも譽めあげるところがない。個人としてはわがままな、平凡な人間である。おしゃれであるといってもモデルのようではない。親切かと言えば、むしろ不親切である。謹嚴かと言えば大阪人らしいお調子者である。面白いことが好きで、酒を飲むと京劇を歌い始める。基本的には眞面目であるが、もっと眞面目な人間は澤山いる。いったい研究を除いた高田君にどこか優れたところがあるのだろうか？ はなはだ難しい。

私は高田君とは高校時代（天王寺高校）、つまり17、8才の頃からの知り合いであるから、未熟な時代から見ていることになる。どんな偉大な人間でも平凡な姿の時代である。中國では錦を着て故郷に歸ると全てが変わると考えるようであるが、日本ではそうでもない。筋向かいのタゴ作が錦を着て歸って来て

も、「錦を着たタゴ作」である。襤褸を着て歸ってきて「襤褸を着たタゴ作」である（日本人は中國の諺や逸話を好むが日本的感情には合っていないことも少なくない）。偉い學者になっても人格まで偉くなるものでもない。高田君も私から、高潔な人柄でと言われても、「嘘つくなヨ」とこそばゆいだけであろう。

高校の先生は後に「扱いにくい生徒やった」と述懐されていたが、本質的にはそんなに尖った人間ではない。彼は博學でつまらないことまで知っており、それを相手に伝えようとした時、周囲に對する配慮に缺けて、生意気で偉そうに見えることもあった。しかし反發することなくその言葉を聞いていれば、偉ぶるとか得意になっているという感覺がないことに氣付く。一番良い付き合い方は、高田君を博識で分析力のある男と認め、「歩く事典」として活用することである。ただし、ときどきホラが混じるので氣を付けておく必要もある。

高田君は研究の面では能力を十分に發揮できるテーマを探しだし、職場も自分に合った所に落ち着いていたので、これまでの時間はほんとうに充實していただろう。ただし、その成果については、立派なものとして奉る氣持ちがないようである。人間のやったことは人間の生活の範圍にあるもので、しかめ面をして崇める必要はないと考えていると思われる。このあたりの感覺は大阪的でよく理解でき、彼が自分の研究成果を誇らないことに繋がっているのであろう。

また、職場にも恵まれたと思う。私の印象では、人文科學研究所はわがままな研究者が揃っている。従って彼は異端にはならないし、目立ちもしない。學生や院生を育てながらであれば、研究の中斷、興味のないテーマの講義、學生の生活への配慮など、高田君には耐えられないことであっただろう。

小川環樹先生がもっとも將來を囑望していた高田君が、期待に違わず世界的な學者となり、ここで一區切りをつけ、新しい環境の中で、新しい試みを始めるという。その門出を祝い、まさに世界的な研究者、そして高田君の薫陶を受けた若手からの寄稿がここに結集したことを言祝ぎたい。十年後を期待して待ってみよう。予想に反して世界各地で多くの弟子を育てているかもしれない。

木 田 章 義

京都大學文學研究科教授